丹後地方の回転台土師器

－横枕遺跡出土遺物を中心に－

松尾史子

1．はじめに

丹後地方の古代から中世への変革期の土器についての研究は、1976年に高橋美久二氏が全般的な編年を試みられたのが最初で、それを契機として1987年に竹原一彦氏が黒色土器の編年を行った。[注1] ここでテーマとする回転台土師器(ロクロで成形された土師器)については、出土資料が限られていたこともあり、研究の対象とされていなかったようである。回転台土師器については、これまで中世土器研究会等で研究が蓄積されており、1990年にはシンポジウムも行われている。[注2] しかし、その時点では丹後地方を含めた畿内周辺の様相は明らかでなかったように思う。その後の発掘調査により資料が蓄積され、丹後の回転台土師器についても、おおよその変遷が明らかになってきた。なかでも筆者が担当した平成9年度網野町横枕遺跡の調査では、底部ヘラ切り・糸切り両方の回転台土師器が多量にまとまって出土しており、当該期の貴重な資料を得た。[注3] しかし、概報執筆段階では整理が進んでおらず、十分な報告ができなかったので、ここで改めて整理し、若干の検討を加えたい。

2．遺跡の概要

まず、横枕遺跡出土の資料の概要について簡単に説明しておきたい。

横枕遺跡は京都府北部の網野町に所在する遺跡で、離れ湖の東岸に張り出す丘陵の先端部付近に位置する。標高は約9～12mである。『京都府遺跡地図』[注4] では平安時代の遺物散布地となっており、高橋氏の編年では9～10世紀の資料として当遺跡の表採資料が紹介されている。平成7年度の試掘調査を受けて、平成9年度に本調査を行ったところ、平安時代および中世の遺構・遺物を確認した。平成9年度の調査では、丘陵先端から谷部にかけて調査区を設けた。

検出遺構は、鎌倉時代の掘立柱建物、平安時代から鎌倉時代の柱穴、井戸・土坑を伴うテラス状遺構、鍛冶関連の土坑である。

出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁などのほか、石鍋・帯金具、鉄滓があり、墨書土器や転用硯なども含まれる。組成としては土師器が主

体である。これらの遺物のほとんどが谷部の埋土から出土した。中心となる時期は緑釉陶器および灰釉陶器の年代により、９世紀後半から10世紀前半と考えている。これらの遺物の特徴は、器種が豊富な点や特殊遺物が目立つ点など、官衙的な様相が強いことである。

また、立地条件に注目すると、離れ湖は日本海側に多く分布する潟湖のひとつであったといわれており(注6)、時期的に平安海進のころにあたることから、遺跡周辺は当時は水運の便が良かったと考えられる。『網野町誌』(注7)によると、平安海進のころの海面は、現在の海面より＋2.5ｍのところにあったと考えられている。時期は下るが、離れ湖が17世紀の絵図に入海の状態で描かれていることからも、天然の良港であったことが想像できる。

以上のことから横枕遺跡の性格については、公的なものか私的なものか不明であるが、水運を利用して物資を集積していた場所であった可能性が高いと考える。

３．出土遺物の再検討

さて、先述のように横枕遺跡で出土した遺物はそのほとんどが谷部の埋土から出土したのであるが、次にそれらの層位関係を整理しておきたい。谷部の埋土は大きく上・中・下の３層に分けることができ、土器組成および出土比率は第１表のとおりである(注8)。これをみると、各層において土師器が85％を占め、他の器種の出土量をはるかにしのいでいる。須恵器は上層にいくほど減少し、黒色土器はその逆で上層にいくほど増加する傾向にある。赤彩土師器や無釉陶器は主に下層から出土する。各層からの出土遺物を図化したのが第１図である。各器種の出土状況を詳しく見ていくと、須恵器については、椀・杯・皿・壺・甕等がある。下層では杯Ｂが主体に出土していたのに対し、上層では底部糸切りの椀が出土する傾向がある。下層の年代は、杯Ｂの高台の貼り付け方や杯蓋の口縁端部が屈曲するもの(29)と、つまみが無く、口縁端部を丸く納めるもの(30・31)が存在することから、８世紀後半から９世紀中ごろと考えられる。全体を通じて８世紀前半に遡る資料は見られない。

土師器には杯・椀・皿・甕があり、食膳具については、ほとんどが回転台成形である。底部ヘラ切りの杯が下層で多く出土するのに対し、底部糸切りの杯・椀・皿は中層・上層で

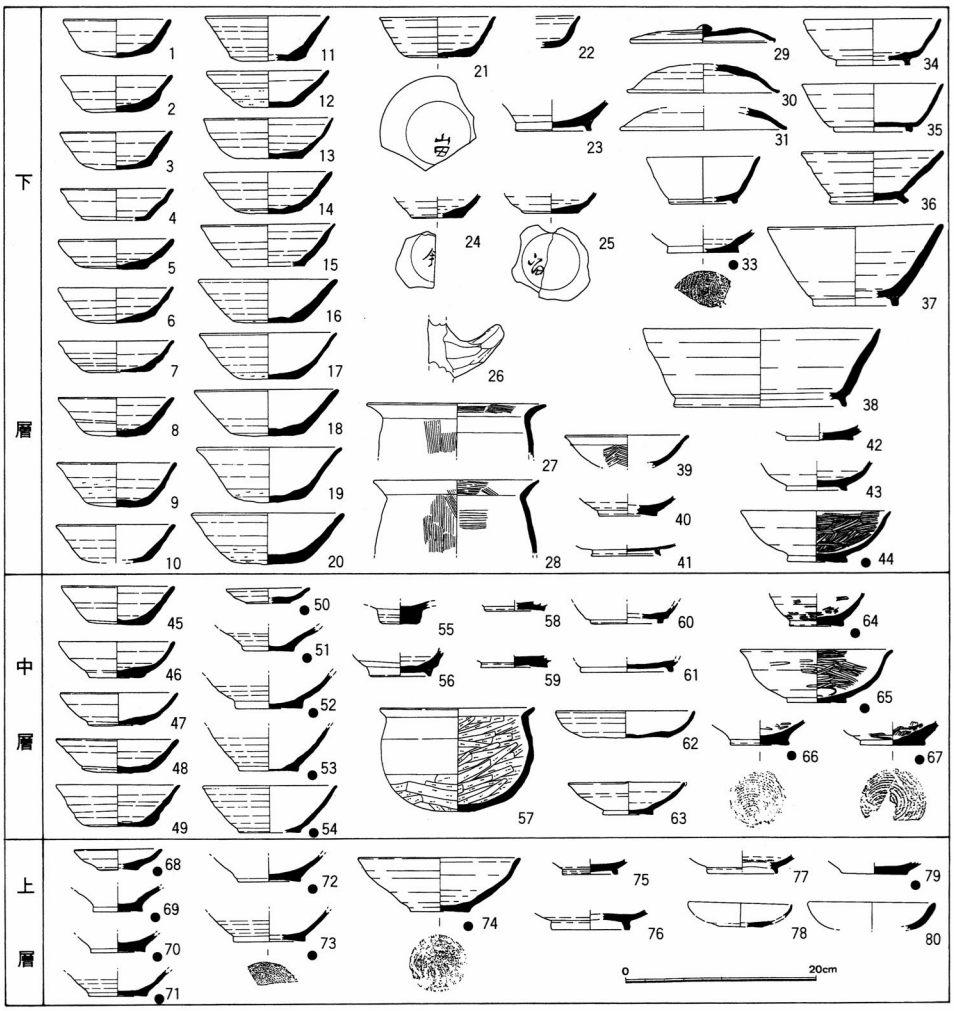
第１表　各器種出土比率

	土師器	赤彩土師器	須恵器	黒色土器	無釉陶器	緑釉陶器	灰釉陶器	輸入陶磁器	合計
上層	853	0	26	98	0	7	5	4	993
	85.9%	0.0%	2.6%	9.9%	0.0%	0.7%	0.5%	0.4%	100%
中層	958	2	48	88	5	14	1	0	1116
	85.8%	0.2%	4.3%	7.9%	0.5%	1.3%	0.1%	0.0%	100.1%
下層	846	10	62	40	11	12	3	0	984
	86.0%	1.0%	6.3%	4.1%	1.1%	1.2%	0.3%	0.0%	100%

出土する傾向がうかがえる。このことから、少なくとも底部糸切りの杯・椀・皿は、底部ヘラ切りの杯より後出するといえるであろう。底部ヘラ切りの杯には墨書土器が含まれる(21・24・25)。

黒色土器には椀・皿があり、竹原編年のⅡ・Ⅲ類が多い。上層にいくほど出土量が多くなる。下層の44は竹原編年のⅡ類に相当し、11世紀代の年代が与えられるものである。しかし、ここでは他の資料との年代観から混入の可能性が高いと考えている。

緑釉陶器には椀・皿があり、京都産がほとんどである。これらは9世紀後半から10世紀中ごろの資料で、10世紀前半が中心となる。下層から9世紀代の資料が出土する傾向にあ



第1図　横枕遺跡谷埋土出土遺物(●は底部糸切り)

土師器；1～28・45～57・68～73・80　須恵器；29～38・60～62・74　黒色土器；41・44・64～67・79　無湧陶器；39・40・63　緑釉陶器；42・43・59・76・77　白磁；78

る。上層の76は近江産の緑釉陶器である。

灰釉陶器には椀・皿があり、ほぼ緑釉陶器と同じ年代の資料である。

輸入陶磁器には青磁・白磁があり、上層から12世紀代の白磁皿(78)[注9]が出土している。

以上のことから、下層で主体となる底部ヘラ切りの土師器杯には、少なくとも8世紀後半から9世紀中ごろの年代が与えられると考える。下層から9世紀代の緑釉陶器が出土している点からもいえよう。上層は黒色土器や輸入陶磁器から下限が12・13世紀ごろと考えられる。また、中層の年代については、椀形態に底部糸切り技法が導入されるのがいつかという問題とかかわってくるが、別稿において検討したい。篠窯の須恵器の供膳具に糸切り技法が導入されるのが9世紀半ば頃であることから[注10]、少なくともそれ以降と考えられる。土師器・須恵器とも底部糸切り椀が出現する時期やその先後関係について明らかにすることは困難である。

4．回転台土師器の分類

さて、冒頭で述べたように平成7・9年度の調査の成果のひとつとして、回転台土師器がまとまって出土したことが挙げられ、底部ヘラ切りと底部糸切りの土師器が出土層位によりある程度の前後関係をもつと考えられた。このことは、横枕遺跡が存在していた時期に土師器の底部調整がヘラ切りから糸切りに変化したことを示唆するものであり、この資料の位置付けは当該期の丹後地方の土器編年をしていく上で重要であると考えた。

そこで、今回はとくに回転台土師器の出現時期について検討してみたい。

横枕遺跡で出土した回転台土師器は、形態の特徴から畿内産土師器模倣系と須恵器模倣系の2つに分類でき、それぞれ調整等によりさらに分類できる(第2図参照)。

Ⅰ　畿内産土師器模倣系

回転台成形で、律令的土器様式における畿内の土師器(杯A・皿A)を模倣した土師器。口縁端部を内側に肥厚させ、体部下半を削る。暗文・ヘラ磨きを施すものと省略するものがある。

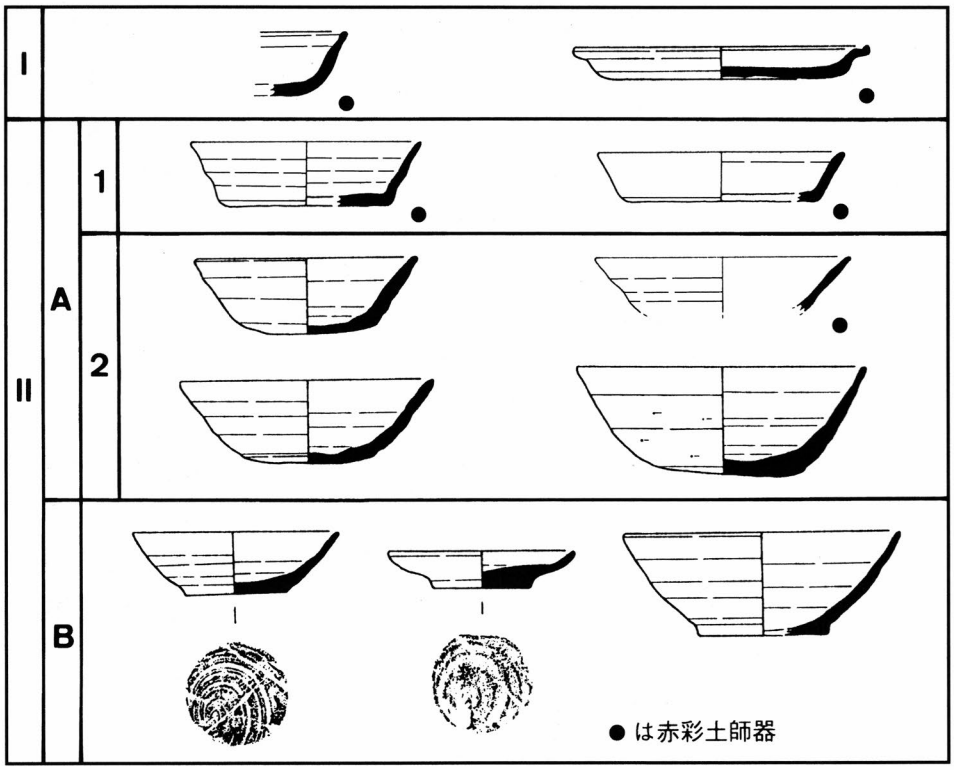
Ⅱ　須恵器模倣系

回転台成形で、須恵器杯を模倣した土師器。内外面をロクロナデで調整し、暗文等の調整は施さない。形態・胎土・底部の調整方法により2種類に分類できる。

1　底部ヘラ切りの杯‥‥胎土は粗く、器壁が厚い。

a　・平底で体部が直線的に外上方に立ち上がるもの。いわゆる平城の須恵器杯Aと同じ形態のもの。

・器高が浅く口径と底部径の差が小さい。



第２図　出土土師器分類表

b　・平底で体部がやや湾曲して斜め方向に立ち上がる。体部と底部の境をヘラ削りで調整するものとしないものがある。

・器高が深く口径に対する底部径は小さい。

2　底部糸切りの杯・椀・皿‥‥胎土は精良で黒色土器と同じである。器壁は薄い。

Ⅱ１ｂの底部ヘラ切りの杯の法量には、大・小の２つのタイプがある。大は口径15cm前後、小は口径12・13cm前後である。小には胎土が精良で器壁が薄めのものがあり、それらは形態的にも高台を意識しているような特徴がある。

Ⅱ２類については、ほとんどが椀で杯・皿は少ない。椀は口径14cm前後・器高５～６cmのものが多い。杯はⅡ１ｂの小と同じく口径12・13cm前後のものが多い。皿は底径が４cmぐらいで椀より小さく、黒色土器の皿とほぼ同じ形態である。

先述のように量的にはⅡ類が多く出土しており、Ⅱ１が谷の埋土の下層から、Ⅱ２は上層から出土する傾向にある。また、Ⅰ類はすべて赤彩され、Ⅱ類は１には赤彩されるものがあるが、２には赤彩されるものがない。このように形態的特徴および出土層位関係などから、これらはⅠ→Ⅱ１ａ→Ⅱ１ｂ→Ⅱ２の順に変遷するものと考えられる。しかし、各形態のもつ時間幅については検討を要する。

さらに、赤彩土師器が回転台土師器にしめる割合はごくわずかではあるが、形態的にⅠ類のほうが古く、すべて赤彩されることから、これらを検討することによって回転台土師器の出現について考察することができるのではないかと考えた。そこで、次に丹後地方で出土した赤彩土師器について、若干の検討を試みたい。

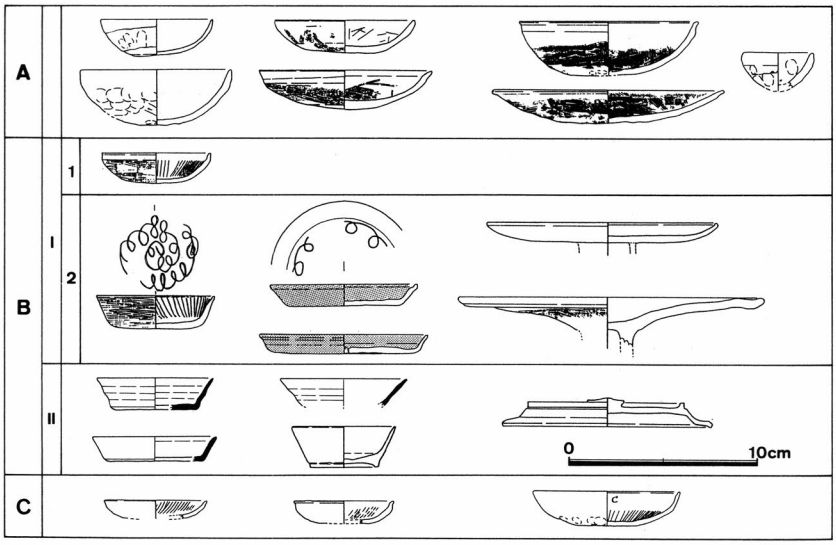
５．丹後出土の赤彩土師器

ここでいう赤彩土師器とは赤色顔料で塗彩した律令期の土師器である。

まず、横枕遺跡での赤彩土師器の出土状況を整理すると以下のとおりである。

出土点数は、破片点数で52点で、全体に占める割合はごくわずかである。うちわけは、Ⅰ類：畿内産土師器模倣系が８点で15％、Ⅱ類：須恵器模倣系が44点で85％となる。Ⅰ類のうち、暗文を施すものは１点のみで、省略しているものがほとんどである。谷の埋土の下層から出土する傾向にあることと、形態的に奈良時代の平城京の土師器杯Ａと同様の特徴をもつことから、横枕遺跡の土器群においては時期的に古い一群になると考えられ、Ⅰ類については共伴する須恵器の年代から８世紀後半代まで遡る可能性がある。

赤彩土師器については、全国的な視野で研究された鶴間正昭氏の論考[(注11)]がある。鶴間氏によると、赤彩土師器は全国的にみると分布域と非分布域があり、その特徴として「ロクロ製品が目立つこと」、「畿内系譜の供膳形態が主な対象であること」、「官衙遺跡での出土が多いこと」が挙げられている。その時点では、丹後の様相は明確にされていない。そこで、丹後地方で畿内産土師器と赤彩土師器が出土する遺跡を集成してみたのが第２表で、第３



第３図　古代の土師器の分類

第２表　赤彩土師器出土遺跡

遺跡名	A	BⅠ1	BⅠ2	BⅡ	C	時期
有熊遺跡	○					5世紀
有明古墳	○	○				6世紀
大田鼻2・6・20号横穴					○	6世紀末～7世紀初頭
高浪古墳					○	7世紀前半～後半
明石裏ノ谷遺跡		○				7世紀代
定山遺跡	○	○				7世紀前半
大田鼻7・11号横穴	○					7世紀前半？
下山横穴	○					7世紀後半～
幾坂遺跡Ｂ地点	○●		●		○	7世紀前半～後半
大田鼻17・19・24号横穴	○●		●		○	7世紀後半
高山12号墳	●				○	7世紀後半
里ヶ谷横穴群	○●	○	○			7世紀後半
大田鼻9・22・23号横穴	○●					8世紀前半
大田鼻15号横穴	○●		○			8世紀前半
有明横穴群	○●				○	7世紀後半～8世紀前半
左坂横穴群	○		●			7世紀後半～8世紀前半
こくばら野遺跡		○	○●			7世紀後半～8世紀前半
志高遺跡			○			7世紀後半～8世紀後半
桑飼上遺跡		○	○			7世紀後半～8世紀後半
日光寺遺跡		○				7世紀末～8世紀前半
千原遺跡	○		○			7世紀末～8世紀後半
竹野遺跡	○	○	○●	○		7世紀初頭～8世紀前半
日置遺跡	○		○●	○		7世紀初頭～10世紀前半
国分寺隣接地遺跡		○	○●			7世紀初頭～10世紀後半
中野遺跡			○●	○●		7世紀前半～11世紀
クズレ谷遺跡			○			8世紀前半
蔵ヶ崎遺跡			●			8世紀前半
大田鼻28号横穴			○●			8世紀中
正垣遺跡	○●	○？	○	○		8世紀～
横枕遺跡			●	○●		8世紀後半？～10世紀前半
松田遺跡			○●	○		8世紀・9世紀後半～10世紀
千原古墳再利用				●		9・10世紀
日置北遺跡第３次Ｐ４				○		9世紀中～後半
縁城寺旧境内隣接地遺跡				○		9世紀後半～10世紀

●は赤彩土師器、○は土師器

図は具体例を図示したものである。

Ａ群は、古墳時代の系譜を引く手づくねの土師器で、椀・杯・皿がある。

Ｂ群は、Ⅰ類が土師器模倣系で、Ⅱ類が須恵器模倣系である。Ⅰ類１は手づくねで、杯Ｃを模倣している。赤彩されるものは今のところ確認されていない。Ⅰ類２は回転台成形で、杯Ａ・杯Ｃ他を模倣している。横枕遺跡出土資料のⅠ類はこれにあたる。Ⅱ類には杯Ａ・Ｂ、杯蓋を模倣したものがある。横枕遺跡出土資料のⅡ１ａはこれにあたる。

Ｃ群は、畿内産土師器(搬入品)と考えられるもので、現段階では杯Ｃのみがある。胎土が赤く、赤彩されるものはない。

第２表をみると、分布には地域的な偏りはなく、大半が７・８世紀の遺跡であることがわかる。器形には椀・杯・杯蓋・皿・高杯・鉢などがある。赤彩行為自体は大田鼻17号横穴[注12]や有明５号横穴[注13]などで明らかなように７世紀後半から見られるようになる。調査の偏りに起因するのかもしれないが、７世紀代は横穴の資料が多く、Ａ群に赤彩する。８世紀代の資料については、官衙関連遺跡で出土している傾向があり、これまで「丹塗土師器」と報告されている例が多い。奈良時代の畿内産土師器杯・皿Ａなどを模倣したＢ群に赤彩する。『中野遺跡第４次発掘調査概要[注14]』の考察においても、その特徴としてロクロ成形であること、形態および調整において畿内の土器を模倣していることなどが挙げられている。

また、製作技法の点から見ると、Ａ群は非ロクロ(手づくね)であるのに対し、Ｂ群のⅠ類２およびⅡ類はロクロ成形であり、前者と後者は系譜的にはつながらない。大田鼻横穴群の資料を見てみると、８世紀前半の23・15号横穴出土資料ではＡ群(非ロクロ土師器)の椀・皿が主体であり、８世紀中ごろから後半の資料である28号横穴でＢ群Ⅱ類(ロクロ成形)の杯・皿が出土している。このことから、丹後地域では８世紀中ごろから後半に土師器生産技術においてロクロの導入という一つの画期があったと考えられる[注15]。すなわち、須恵器の生産技術を以て土師器生産が行われるようになるのであり、この時期を回転台土師器の出現時期と捉えられるのではないだろうか。

以上のことをまとめると、次のようになる。丹後地域での赤色塗彩行為は、７世紀中ごろの畿内産土師器の搬入を契機に始められ、当初は在地の土器に導入された。奈良時代になると赤彩行為は新しい畿内系譜の供膳具を対象に施されるようになる。同じころに土師器生産においてはロクロの導入という技術的革新が起こり、回転台土師器が出現するのではないかと考えられる。なお、概念規定において、Ａ群については赤彩土師器とするべきか検討の余地がある。

6．おわりに

赤彩土師器の検討により、回転台土師器が畿内模倣系赤彩土師器と同じころに出現する可能性がうかがえた。その時期は8世紀中頃から後半になるのではないかと考えられる。

また、土師器におけるロクロの導入が何を契機に行われたのか、その背景にある須恵器工人と土師器工人の関係がどのようなものであったのかという問題は、当時の土器の生産体制を考える上で重要であるが、筆者の力量不足でそこまで考察することはできなかった。地域によっては9世紀段階で須恵器生産が衰退するようであるが、丹後では峰山町名地谷窯跡や名地谷遺跡で見られるように、10世紀代にも須恵器生産が行われている。今後の資料の増加を待って丹後の窯業生産についても考えていく必要があろう。

畿内以外の在地で主体をなす回転台土師器については、須恵器および土師器における底部糸切り技法・椀形態の導入の時期、底部糸切り須恵器椀・土師器椀・黒色土器椀の共伴関係などを編年していく上で重要な問題が多い。すべての問題を横枕遺跡の資料のなかで解決できるわけではないが、今後の資料の蓄積を待って検討していきたい。

（まつお・ふみこ＝当センター調査第2課調査第4係調査員）

注1　高橋美久二「丹後地方の平安時代土器」(『京都考古』第25号　京都考古刊行会)　1976

注2　竹原一彦「丹後における黒色土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注3　シンポジウム実行委員会『シンポジウム　「土器からみた中世社会の成立』1990

注4　松尾史子・伊野近富「横枕遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第82冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998

注5　京都府教育委員会編『京都府遺跡地図』第1分冊　1988

注6　三浦　到「丹後の古墳と古代の港」(『考古学と古代史』(『同志社考古学シリーズ』Ⅰ)　同志社大学考古学シリーズ刊行会

森　浩一「潟と港を発掘する」(『日本の古代』3　中央公論社)　1986

注7　網野町誌編纂室編『網野町誌』　1992

注8　表は各器種の破片点数を集計したものである。土師器は供膳具のみでも基本的に出土比率は変わらない。須恵器は貯蔵具を含めると各層で10％を保つが、供膳具のみでは上層にいくほど減少する。このことから須恵器の食器としての需要は減っても貯蔵具に関しては一定の割合を保つことがうかがえる。

注9　森田　勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館)　1978

同『大宰府条坊跡Ⅱ』(大宰府教育委員会)　1983

注10　篠窯跡の調査を担当した当調査研究センター石井清司主任調査員の教示による。

注11　「奈良時代赤彩土師器の様相とその意味」(『古代学研究』第122号　古代学研究会)　1990

注12　岡田晃治「丹後大田鼻横穴群の再検討」(『史想』22　京都教育大考古学研究会)　1989

注13　今田昇一・橋本勝行「第6章　有明横穴群」(『京都府大宮町文化財調査報告書』第14集　大宮町教育委員会)　1998

注14　中野遺跡や丹後国分寺隣接地遺跡などでは胎土が赤く赤彩しないものもある。それらについては搬入品か在地産か不明である。畿内産模倣系の手づくねタイプになる可能性がある。横枕遺跡では胎土の赤いタイプは出土していない。

注15　同様の赤彩土師器は山陽・山陰地方でも見られ、それらは底部押圧技法で成形されるのが一般的である。時期的には7世紀末ごろから存在し、9世紀には暗文などの調整が省略されるようである。(武田恭彰「山陽」『第18回中世土器研究会報告資料　平安時代の土器・陶磁器研究』中世土器研究会　1999)。横枕遺跡の例をみると、古い一群であるⅠ類が共伴する須恵器の年代から8世紀後半代に遡る可能性があること、後出のⅡ類は暗文を省略することから、丹後地方でも山陽・山陰地方と同様の変遷過程が想定できるのではないだろうか。